

米水津村周辺の考古学上の

「遺跡・遺物」発見者の物語 (三)

市野瀬 仁

(会員・佐伯市長島町)

はじめにお断りしたように、『米水津村誌』に記載されなかった「考古学上の発見者の物語」を掲載してまいりました。ところが今回は省略の部分もあり、村誌に記載していない私の説明が中にあることから読みづらい点があると思いますので、まず、その点についてのお許しをお願いしておきます。

弥生時代

縄文時代は、狩猟・採集の新石器文化であった。そのころ世界の先進地域では農業を営み、青銅器や鉄器をもつ文明が栄えていた。

今から二千年数百年前、北部九州の沿岸に、ようやく朝鮮半島から稲作農耕が伝えられた。端正な形をした弥生土器と、青銅利器に象徴される新しい時代が始まった。

この文化は海路北九州から宇佐・別府湾岸へ伝わった。

別に筑後川沿いに日田方面に入る「筑後川ルート」もあった(豊の国創世紀展図目録より)。

この時代は、紀元前三百年から紀元後三百年までの六百年間をさして、前期・中期・後期に区分されている。おおよそ日本が統一される大和時代初めの頃までの時期である。

稲作 右のように弥生時代は、稲作農耕が本格的に農耕 始まったことを第一の特徴とする。人々は河川

流域の低湿地帯を占有し、堅穴住居を作って集落を形成した。その大規模な遺跡が静岡市登呂の遺跡である。

昭和十八年(一九四三)第二次大戦の最中、ここに軍が工場を作るべき地盛の必要から、その附近の水田地域

の土を一メートル上げていた時に発見した。戦後、昭和二十二年から発掘調査が始まり、漸次弥生後期の一農村集落の風景が日の目を見たのである。多数の出土品は勿論、水田の畦の跡、五、六軒が集まって一戸をなす原型。土地の私有が規画のもとに行われていたのではないかなど、考古学・歴史学の上で貴重な史料を提供したのであった。

それより三年後、昭和二十五年（一九五〇）大分県東国東郡国東町大字安国寺の水田にて、弥生時代後期の集落遺跡の発掘が二カ年にわたって行われた。貴重な出土品が各種多数発掘されると共に、環壕集落（集落に周溝がめぐらされたもの）が、この時代に既に存在したことが分かった。以来東日本の登呂遺跡に対して、安国寺遺跡を西日本の登呂と呼ばれた。

この二大発掘遺跡を契機として、弥生時代の稲作技術や高床式家屋、湿気や動物の侵入を防ぐ柵、柱の上部に鼠返を設ける等、弥生人の生活の知恵が分かるようになる。また、米が食料の重要部分となると、その食べ方も甕を二つ重ねて飯（こしき）で蒸して食べたことなど判明するようになり、生活レベルや社会の諸相が分かるよ

うになった。

佐伯地区の稲作農耕は、堅田地区の下城・長良及び城山の西方山麓にある白濁遺跡によって想定することが出来る。

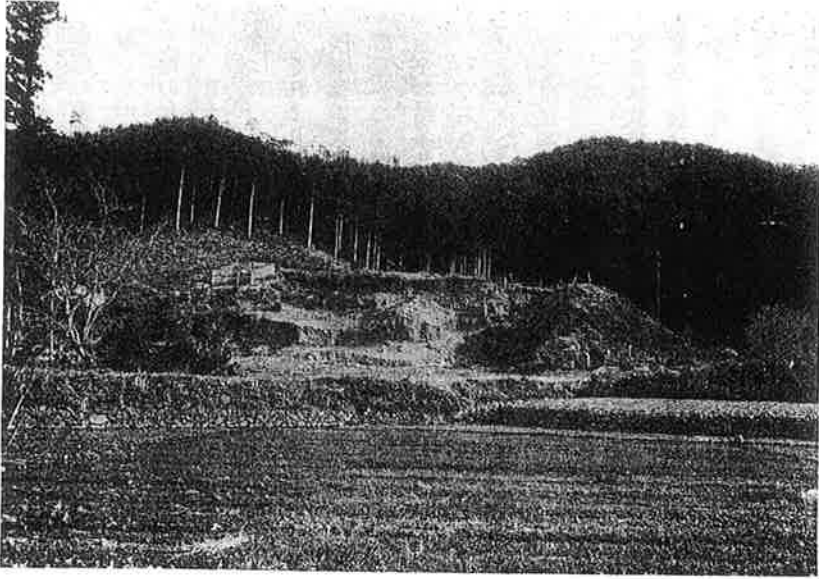
一 白濁遺跡発見について

白濁遺跡の発掘があった昭和三十二年といえば、私は鶴岡小学校に勤めていた年であった。学校から発掘現場は、約一キロ東方の真正面に位置する所であったので、私は授業が済むと、現場に駆けつけては見学をしたことを思い出す。その時、蔵骨器が発見されたということや興奮気味の空気が漂っていたことが強く印象に残っている。

では、これから発見者の経緯を聞くことにしよう。

佐伯市若宮 若宮八幡宮司 緒方 寿生

昭和三十一年十月、若宮八幡神社所有（遺跡周辺一帯の雑木を伐採して、杉林造をしようと考えた。更に下部地帯に児童公園を造成する計画をもっていたのでこれを



発掘当時の白濁

実施しようとした。

昭和三十二年二月、雑木を伐採した跡に杉苗植林作業中、貝塚地層を発見した。また、公園計画地の土掘り落としの作業中に、蔵骨器二個を発掘するに至り、作業を中止することにして、佐伯市教育委員会に連絡した。

市教委は県教委に連絡し、昭和三十二年五月二十七日に県文化財専門委員の別府大学賀川教授が現地調査のため来佐した。賀川教授は弥生時代の貝塚であることを確認した。そこで、市教委と神社共同責任に於いて学術調査を行うことに決定し、右調査方を県教委に申請することにした。

学術発掘調査団結成

- 一、発掘調査責任者 市教委教育長・神官宮司
 - 一、発掘調査担当官 賀川光夫教授
 - 一、調査員 九州大学院小田富士雄 市教委藤田主事
 - 一、調査補助員 市教委伊藤主事・九大学生二名・別府大学生三名・大分大学生一名
- 一、発掘後の遺物等の整理分類に当たっては、貝類は市内本町の今泉弥佐助・大入島中学神田教諭、発掘人骨は九大解剖金関教授、石器は九大唐木田教

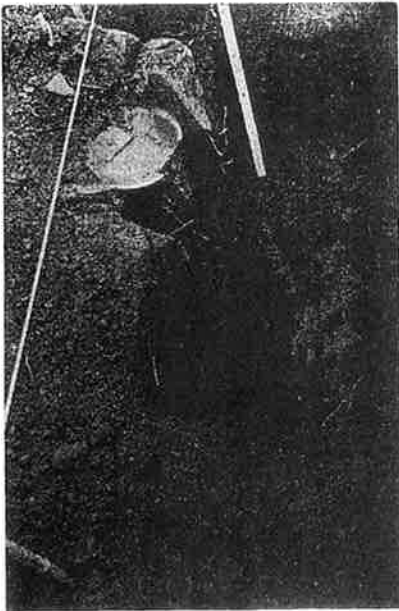
授、獸骨は九大松尾教授、魚骨は九大内田教授、炭化種子を九大小島教授
以上の学識者により分類鑑別整理された。

写真説明 (蔵骨器第三号出土状況)

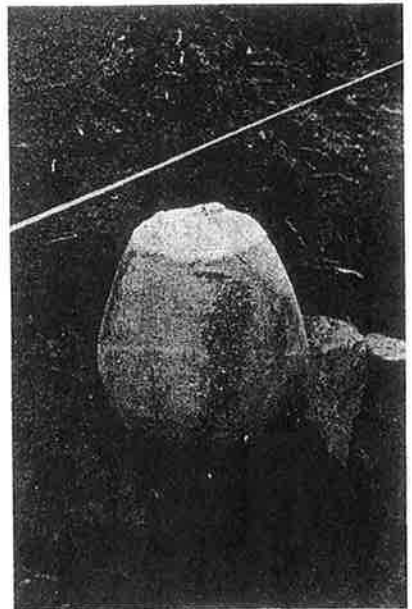
- 1 蔵骨器下の石組
- 2 蔵骨器の蓋と側石
- 3 蔵骨器測量状況



蔵骨器下の石組



蔵骨器の蓋と側石



蔵骨器側置状況

発掘調査の実施

第一期 六月二十三日から七月二日まで 貝塚中心

第二期 十月十一日から十月十五日まで 住居跡

第三期 翌年一月十七日から一月二十日まで (賀

川・小田)

保存復元委員会の組織

昭和三十二年十二月十日 発掘調査完了報告祭執行後、直ちに結成した。

右計画実施案(八十万円)

一 学術調査書の発行(六〇〇冊)

二 竪穴住居の家屋復元

三 発掘後の現状をそのまま保存する

四 遺物・遺品の展示室の設置

二千年前の人々の生活の実態が、土中深く埋もれていて。これら埋蔵文化財が明るみに出たことは、求めて得られるものでなく、天の恵み、神の恵みによるものである。その上、民間所有地でなく神社の所有地内に埋蔵されていたことに感謝している。

いま一つは、学術調査書の発行である。こうした埋蔵文化財の発掘記録は、従来のように専門家のための専有物

にせず、一般人に知らしめることを考えた。その結果、記録書六百冊を出版して関係者に配布した。発掘した資料の若干は神社に展示し、一般人・学校生徒に自由に見学できるようにしている。記録の原本資料は神社に保管されているし、増版も可能である。

以上二つのことは、私として無限の喜びとしているところである。

金属の使用と弥生式土器の名称

金属器 銅・鉄両器は大陸で充分普及した後に、ほぼの使用 同じ時期に影響されたとみてよい。そして弥

生時代には、銅・鉄両器はわが国でも仿製(国産の鏡)されたことが九州北部地方で明かにされている。

鉄器が広くゆきわたるのは弥生時代後期になる。金属は、鉄製穂摘具をはじめ鉄製鎌・鉄鎌等の農具や鉄鎌・鉄斧・鉈(やりかんな)・鉄ノミ・鉄製の釣針等、狩猟に、漁獲に、家屋建築等に使用されて、日常生活は大幅に改善された。

また、青銅器は銅と錫・鉛の合金で、比較的加工の容

易な金属である。鉄器による開発が進むと村々が増加しそれを統率する首長のシンボルである銅剣や銅矛（か）や銅矛（ほこ）が作られた。これらは首長の権威として使用されたばかりでなく、祭器用あるいは儀式用として使われ崇められた。

弥生式土器の名称は、東京都文京区弥生町器の名称の土器を標準形式としていう。明治十七年

(一八八四)三月二日、有坂□蔵が当時の東京市本郷区向ヶ岡（現弥生町）の貝塚で壺型土器を発見したことから標準遺跡とされた。特色は胴部が下膨らみをなし、平底で安定感がある。外面は、数本の棒状隆起文をつけ羽状縄文で飾ったりしている。

二 蒲江町竹野浦河内の遺跡

丸山の 弥生中期の甕（かめ）の破片一、土師器二、土器 須恵器三の出土された場所は住宅地になって

いるが、その裏の段々畠になった杉や雑木の中を探していると、弥生時代の土器の破片が今でも発見

される。

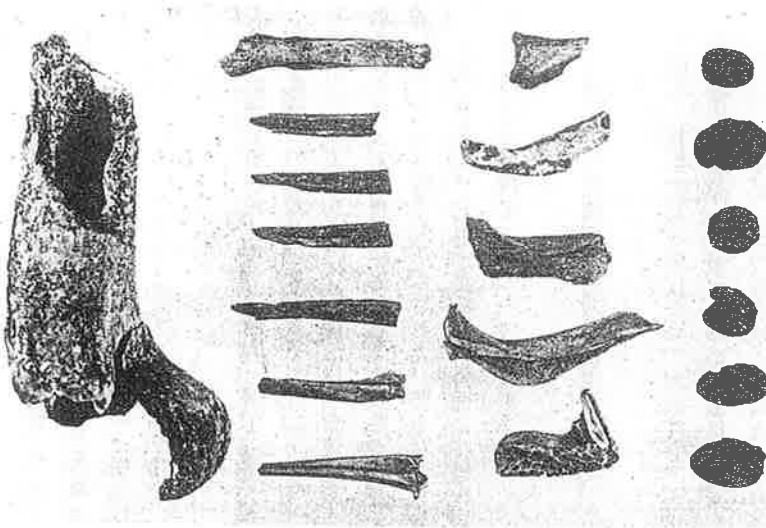
このことについて、蒲江町教育委員会勤務の清家隆仁の手記を見よう。

竹野浦河内の弥生式土器 清家 隆仁

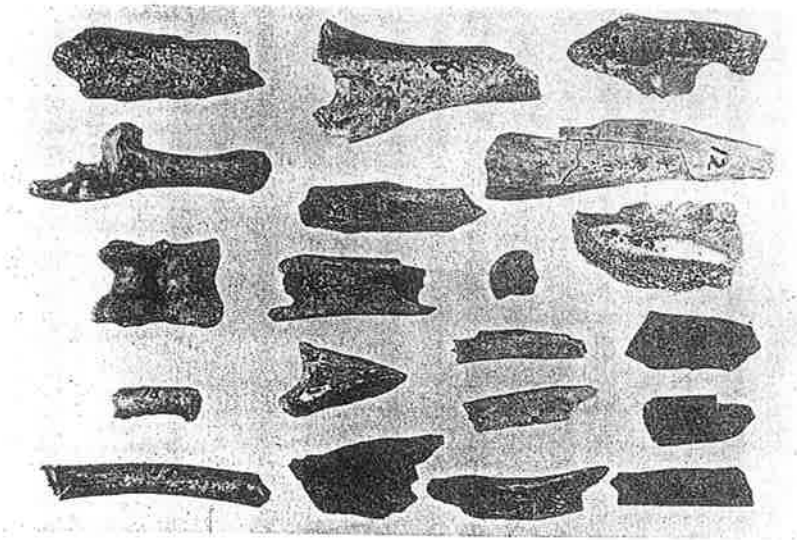
蒲江町内に残っている浦々の居住の伝承によると、蒲江浦の居住が一番古く、平安時代に南紀から七軒の人達がやって来たと言われている。町内の浦々には、それぞれ中世から近世にかけて、ある者は海路から、また、ある者は山を越えて、この土地に移り住んだと伝えられているが、その多くは、対岸の四国や瀬戸内方面の人々である。

ところが、近年になって畑野浦や森崎浦の石斧発見は本町の歴史を大きく変える一ページであったし、竹野浦河内の土器出土は、まさに先住民の存在を証明する確かな証となった。

竹野浦河内は、本町のほぼ中央部に位置している。近年までの交通路は、もっぱら海路であり、文字通り陸の孤島といっても過言ではない。湾口は北側を向き、波静

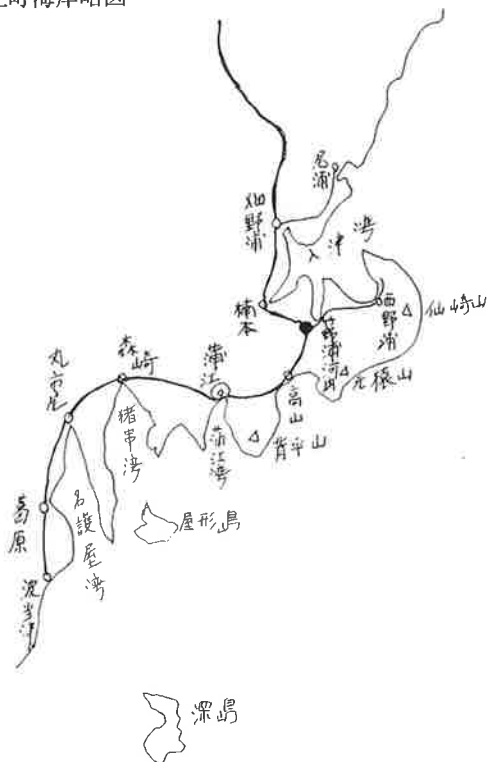


第一貝塚獸骨と第二貝塚魚骨・第二貝塚及び住居址上層炭火種子



第二貝塚獸骨

蒲江町海岸略図



かな入江の狭い土地に集落が存在していて、土地が狭いためか水田は見る事ができない。
土器の出土地は、この浦の内浦と言われる地区で、三方を高い山で囲まれた扇状地である。中心部に小川が流れ、斜面は東の方向に向いた陽当たりの良い土地で、出

土地には現在住宅が建てられているが、以前は畑地であった。この内浦付近には、中世後期のものと思われる五輪塔が点在している。また、近代にはいって、畑の開墾中に石棺らしきものが出てきたとも言われており、多くの謎を秘めた土地と言える。

現在、町の教育委員会に収蔵されている土器は、この宅地の造成中、偶然その廃土の中から地区の人が発見し、町文化財調査委員の磯貝義彦氏によって五二年七月採集されたものである。

出土した土器の中心は、弥生時代後期のものである。また、点数は少ないが、土器や須恵器とも同時に出土しており、このことからかなり長い間にわたっての人々の生活をうかがい知ることができる。

このように、竹野浦河内の出土は、本町の歴史観を大きく変えてしまった。古代には人が住んでいなかったであろうと考えられていた土地に、二千年も前にもう人々の生活が営まれていたからである。この土器



竹野浦河内の土師器と須恵器

の発見により、町内の蒲江浦や野々河内浦など、古くからの居住が伝えられている土地にも、竹野浦河内のような土器や古代人の住居跡の発見の可能性が更に大きくなってきたと言えそうである。

こうしたことから、竹野浦河内は、今後専門家による発掘調査があることを期待されている。

参考文献

- 1 大分県教育委員会 『豊の国創世紀展目録』
- 2 河出書房 『日本歴史大辞典』
- 3 佐伯市教育委員会 『白濁遺跡』昭和三十三年
- 4 賀川光夫 『大分県の考古学』

